

<h1>論文の和文要旨</h1>	
論文題目	現代日本語の事態描写に関わる 動詞性名詞と名詞化節の諸相
氏名	佐藤 佑

本稿では、現代日本語において事態描写の役割を担う、大別して 2 種の言語形式の構造的・意味的特徴の記述を行う。主たる対象となるのは「動き (⇔動く)」「行動 (⇔行動する)」など、動詞との対応関係を有する「動詞性名詞 (VN:「動き」などの「連用 VN」と「行動」などの「サ変 VN」、「引越す」「愛」などの「中間型 VN」の総称)」と、「野球を見るの (は楽しい)」「卵を食べること (で健康を増進する)」といったような、「の」「こと」などによる節単位の名詞化形式である「名詞化節 (NC:「Vスルノ」「Vスルコト」に加え、「その部屋は、ひとりで住むには広すぎた」などの「準体節」も含めた各形式の総称)」である。当然の帰結ではあるが、VNP (単体の VN・「身体の動き」などの名詞句・「無断外出」などの複合名詞) はより名詞的な表現であり、NC はより動詞的な表現である。それが具体的にはどういうことであるか、実用上どのような差異を生むのかを解き明かすことを目指し、自作コーパス (文学作品 10 作品から手作業で収集したデータに基づく) を中心とする事例の分析に基づいて考察を行った。

論文の構成 (全 7 章の内訳) は以下に示すとおりである。

序文で問題提起を行った後、第 1 章で具体的な考察対象の定義 (VN の「動詞との移行」の有無について辞書で確認する等)・データの内訳などの説明を行った。また、特に重要な先行研究 (西尾 1961、平尾 1990、石井 2007、渡邊 2008、奥田 1968-1972 他) を紹介するとともに、本稿との関係を整理し、次章以降の考察の展望を示した。

第 2 章では、NC は「呼ぶ (⇔*呼び)」「入る (⇔*入り)」「ある (⇔*あり)」など、連用形が VN として用いられない動詞の名詞化を中心的な役割としており、サ変動詞の名詞化は限られる (サ変動詞の例は NC 全体の 12% に過ぎない) ということをはじめとして、諸形式の張り合い関係が必ずしも一様でないことを概観した。また、二種の VN 間 (連用 VN

対サ変 VN) で名詞性・単語としての独立性に差が生まれること(「ノミとり」⇔「*ノミのとり」など拘束形態素としてしか用いられない連用 VN や、「流行り」など項を取れない連用 VN が存在するなど) や、二種の NC 間 (V スルノ対 V スルコト) の意味的な相違 (V スルノは渡邊 2008 で主張されるように「事態の『实在』が過去に確定しているか、主節動詞より未来に想定されている」含意を持つが V スルコトはそうした含意を持たず抽象的な「コトガラ」を表す) などを概観することで、次章以降の具体的な考察の足がかりとした。

3 章では、まず第 1 節で VN 句 (身体の動き、的確なアドバイス、何回目かの引越……) および VN 複合語 (おもちゃ遊び、無断外出、家族愛……) の実現形を類型化するとともに、単体 VN (連体修飾を受けず、複合語の後項にもならない VN) も含め、VNP において現れる要素・現れない (あるいは「*私は私のインタビューをした」のように文主語と動作主体が同一であるなどの理由で現れることができない=削除される) 要素のあり方について、当該の VNP が用いられる文脈との関わりを考慮しつつ分析・記述した。具体的には、VN 句に現れる連体修飾要素・VN 複合語の前項の内訳について動詞句との対応関係 (たとえば「英語の勉強」は「英語を勉強する」との対応関係を持ち、ノ格名詞が「動作の対象」を表す) によって分類を行い、それぞれのタイプの構成比を示すとともにタイプ間の連動についても概観した。また、単体 VN についても用法のバリエーションを検討した。こうした分析によって、VNP における主体の省略ないし義務的な削除をはじめとする文脈との関わり方を確認した。これにより、文脈に積極的に依存して簡潔な、「凝縮」的な表現を成すという VNP 一般の性質を指摘した。特にその一環として、「キャンセル待ちの手続き」、「死刑判決」といった、直接対応する動詞句 (文) を持たない「名詞性優位」の連体修飾・複合語形成の存在を指摘し、VNP の「凝縮」性を示す最たるものの一つとして他のタイプと関連づけつつ論じたのは本研究における重要な進展の一つである。特に「陰険ないたずら」「わけのわからない怒り」といった、全体として「当該事態がどのようなものであったか」を述べるタイプの形容詞による修飾などは、4 章で詳述する VNP の「総括性」という重要な性質を示唆するものであった。

VNP が事態を「凝縮」的に述べる形式である一方、NC は意味論的に透明であり、少なからず長大な名詞句を形成する「迂言」的な形式である。3 章 2 節では NC の内部構造についても分析し、完全な文が名詞化される諸例を基本としてその「迂言」性を実証したが、逆にどのような項が欠けているかによるタイプ分けを通じて、種々の項が多少とも文脈により省略される余地があり、また文主語と当該事態の主体が一致する場合や、主体や対象を不問とする「一般論」的な事態が述べられる場合などに項が義務的に削除されるといった VNP と共通の性質も見出された (たとえば「僕は本を読むのをやめた」において、「僕は僕が本を読むのをやめた」と言うことはできないように、文主語と同一の動作主体「僕」は NC に現れることができないという、いわゆる「同一項削除」は両形式ともに見られる。また、たとえば「話すのが得意じゃない」という発話においては「何を話すか」は不問で

あり現れる余地がないなど)。

4章では、VNP および NC の文中で果たす機能を通じて、主に両形式の意味的な異同を分析した。1節では機能動詞結合を、2節では諸形式の動詞・形容詞などとの(連語論的な)関係のあり方を、3節ではより大きな文レベルでの機能を、それぞれ扱った。3章の考察で明らかになったように、VNP は事態を「凝縮」的に述べる形式であるが、そのこととも連動して事態の多側面を未分化に表し、特に事態のあらましを総括して述べる性質(総括性)が機能動詞結合(朝のお祈りをする)、事態の知覚(野球部の練習を見る)、伝達(料理を学ぶ)など種々の構文パターンにおいて見出された。また、さらに事態の総体・あらま시를前もって意識した上で実行・知覚といった行為を行う含意(前提性)を生むことが多いこともわかった(ただし連用VNには「眠り」「考え」など、「様態」「内容」という特定の意味を前面に出すものも一部に存在する)。これに対しNCは「の」「こと」が種々の抽象名詞を代行し、事態の特定側面を限定的に述べる表現である(たとえば「彼が働くのを見た」は「姿」を、「うちで、桃井先生が眠らずに待っていることは知っていた」は情報＝「事実」を、それぞれ表すなど)。これらに加えて、「名詞相当」のNCに比べ名詞であるVNPの方が豊富なバリエーションを示す用法(述語・体言止めの用法、連体修飾要素・複合語との前項としての用法、一部状況語的な用法など)があることも指摘した。また、NC内でも、Vスルノ・Vスルコト間の、話し手が当該事態に対して実感を伴って述べるか否かという相違は、前者が直接知覚(たとえば先述の「見る」や「目に涙がにじむのを感じる」など)に、後者が伝達(たとえば「会社が代々木駅の目の前にあることを教えてくれた」)などに、それぞれ独占的に用いられるなどの分担に繋がっていることを確認した。

5章では、4章で明らかになった事実を中心に、構文を超えて認められる諸形式の種々の特徴について、2章とも適宜照応させつつ再整理し、その一般化を図った。具体的には、『凝縮』と『迂言』＝意味論的透明性(1節)、『総括』と『特定側面』(2節)、「名詞性の高低(3節)」の3つのキーワードを軸として、VNPとNCそれぞれの一般的な性質を再確認し、さらに連用VNの意味や使用そのものが限定される局面(4節)、その他逆にVNPとNCの相違が希薄化する諸条件(5節)を概観した。

6章では、以上の成果を次頁の図に示すような形で総括した。

このように、本稿では複数の観点から諸形式の特徴を詳細に検討し、多角的な記述を行った。これによって、従来の研究では看過されていた問題を多く明らかにし、また種々の先行研究において散逸していた大小多くの成果を一つのテーマの元に統合し、体系的記述の一部として昇華させた。

VNPは「凝縮」的な表現であり、本質的に事態の多側面を未分化に表すゆえに「総括性」

を有する。一方、NCは意味論的に透明かつ「迂言」的で、事態の特定側面を切り出すのが特徴である。こうした相違が存在すること、またそのことが様々な場合において両形式の意味や用法にも差を生んでいることを実例とともに記述したことは本稿の大きな特徴であるが、逆にそうした差がない場合（つまり両形式に共通する部分）などについては十分に明らかにできていない部分もあり、今後はさらに連用VNの使用の可否、またそれに伴うNCとの張り合い関係の変遷といった問題をはじめとして、諸形式の関係のあり方をより強固に裏づける通時的考察も行っていく必要がある。

	VNP	Vスルコト	Vスルノ
情報の表し方 (主に3章)	<ul style="list-style-type: none"> 連体修飾・複合による。 文脈に依拠し「凝縮」的。 	<ul style="list-style-type: none"> 動詞・動詞句・動詞文が直接名詞化。 意味論的に透明で理論上は無限の情報を内包可能。VNPに比べ文脈依拠性は低い。 	
名詞性 (主に4章)	<p>高い。 (抽象名詞としてあらゆる位置に現れうる)</p>	<p>やや低い。 (名詞相当句であり、機能動詞結合・「動作づけ」的な述語用法・状況語的な用法など用いられにくい構文がある)</p>	<p>低い。 (名詞相当句であるが、Vスルコトより取れる格が限られる等、さらに名詞としての能力が限定的になる。ただし、準体句により補完される部分もある)</p>
表す「動作・作用」の意味 (主に4章)	<p>事態の多側面を総括、または特定側面に言及。 (様々な側面が渾然一体としていて、構文により総括的になったり特定側面(主に様態)が前面に出たりと、多様な意味で顕現しうる。 連用VNには「様態」の意味に特化したものもある)</p>	<p>専ら特定側面に特化。</p> <hr/> <p>「事実」「(特に他者の/一般論としての)行為」など(現場性/実感を伴わない)。</p>	<p>「姿」「音」「(特に自らの)行為」など(現場性/実感を伴う)。</p>

図 諸形式の異同の概観